
双炎の廻る回旋曲

ヲタロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双炎の廻る回旋曲

【Nコード】

N1615Z

【作者名】

ヲタロウ

【あらすじ】

人々は個々の才能を『開花』させ、ブルームを手にした。人々はブルームによる絶対的な力を駆使し、さらなる飛躍と輝かしい未来への一步を踏み出す。シグムンド帝国の学生レイヴァンは友人のケントと『部隊』を創設。部隊の仲間達はそれぞれのユメを叶える為、日々奮闘する物語。

お初です。処女作です。つまんなかったらごめんなさい！！

舞台は異世界。でも転生モノではありません。主人公とその仲間達

でワイワイ的な感じだったり。主人公は二人。破天荒とクールです。
文章堅くてごめんなさい。目指せ！完結！

Prologue 〱混沌の時代〱（前書き）

語彙とか大丈夫だね……？

誤字、脱字とか、文章構成のアドバイスとかお願いします！

一応推敲してから出しますけど不安……

Prologue 混沌の時代

ブルーム、それ人類最高にして最低の現象である。

先天、後天を問わず、人間には必ず何らかの才能が備わっている。しかし、人間は自分の才能を十分に発揮出来なったり、持て余したりする。

だが、このことを百年ほど前、ある人物が、「人間は己の能力を十分に御しきれないことが原因である」と仮定し、実験を繰り返した。

その結果、その人物は自らの仮定を証明することに成功。その後、全世界に広まったこの実験結果は、人類の才能の限界を否定した。つまりこの証明は、人類の無限の可能性を証明したのだった。

その後、多くの名高い科学者や研究家達によって研究は進歩の道を辿る。全世界の注目は、この一点に絞られた。

彼らはこの研究にすべての情熱を注ぎ込んだ。彼らの活躍は筆舌に尽くしがたく、志半ばで過労死する者もいた。だが、彼らは、人類には希望に輝く新たな可能性を人々に伝えたいが為に、日々研究に没頭した。

世代を重ねる事になったが、彼らはわずか二十年余りで驚くべき発見をした。

「人々の才能の成長には限度が無い。そして覚醒によって我々人間は個々の能力をさらに有益に、そして形あるものとして、使役することが可能である」と。

つまり、個人の能力は文字通り目に見えるようになるようになった。

例えば、料理が得意な人だったら、包丁がひとりで宙を舞って食材を刻み、勝手に鍋がそれを煮る。

研究者達の血の努力によって、人類は今までに無かった、人とし

ての範囲を超えた力を手に入れた。

元々は誰もが嬉々としてブルームを甘受していた。しかしやがて人々は『気づいて』きた。これまでの兵器ではブルームには全く対抗できない。ブルームによってある人は海を割り、またある人は容易に山を砕き地形を変えることもできるようになったのだから。人々にとってブルームはあまりにも規格外。それまで人々の希望とでも囃された異能の力は恐怖の対象に成り下がった。

今や、かつてに人々の努力も夢も枯れ果てて、度を超えた暴力と残虐な人欲は螺旋を描くようにねじれていく。

Chapter 1 戦火の足音

太陽が昇るより早い朝に、赤い髪の少年が回廊を疾駆する足音が木霊する。昼過ぎにはたくさんの人々で混雑するこの街道も、今は薄く靄がかかり、出口も見えず、視界の限り誰もいない。

少年が走るのはコーカサス大陸の極東にある、周りを多くの小国によって囲まれた、シグムンド帝国が誇る帝都シグルズの街道である。

この都市は世界で唯一都市全体を城に呑み込まれた『城塞都市』で、世界一の鉄壁の守りを実現している。何故こうなったのか？数年前から人々はブルームと言われる莫大な力を手にした。本来、福祉や人類のさらなる発展の為に研究者達が何年にわたる苦勞の末、発見したものだ。

しかし人々の中にはこれを悪用しようと企む輩がいる。彼らの中には単なる犯罪者ではなく各国の政治に関わる者達、つまり革命の思想を持ったグループがいた。

彼らはブルームにより急速に力を蓄えていった。そして国家に十分に對抗することができる戦力になることが予想された。彼らは自称『高貴な』思想に沿って行動を開始した。実質の行動内容は、略奪、暗殺、風評工作などの手段を選ばないものであり、これらの犯罪的行為は民間にも及んだ。

当然、国家と革命家達は次第に対立を深め、国家は革命家達を掃討するように命じた

しかし国家は些か浅はか過ぎた。国家が行動を起こすようになった頃には、革命家達は既にブルームによって大きな戦力を手にした後だったのだ。未知の力であり、不確定要素の多かったブルームを軽視していた国家は大敗北を味わった。

そして今。国家は革命家達との紛争や、他国からのブルームを使った侵略者の追討、そして同じような境遇に立たされた隣国、これ

らの載積した争いごとにブルームを使用することを決定。

全ての国家が似たような経緯を辿り、世界中で混迷の時代と化したのだ。

話はこの地に戻る。

シグムンド帝国は度重なる戦争から、国を守るために行われた政策の一つで、主要道から路地に至るまで、全ての道が城の中にあり、施設、売店、民家などの建物も皆が例外無く城の一部となっている。従って、この町は高い安全性から人口が多く、特に学者や学生達に人気が多い。

そのためシグルズは学業の街としても名高く、最も有名なのが先代シグムンド帝国王の方針によって設立された巨大図書館である。

この図書館は科学者達の要望によって創設され、街の安全面と相まって学者達の間で噂になることで、より多くの知識人が集まった。すると図書館もさらに大規模になり、より多くの知識に対し貪欲な彼らをますます呼び寄せるようになった。その結果、集まった知識人達によって、街の防備がさらに堅くなる。それがまた学者達を呼び集め……と、その繰り返しでシグルズは世界屈指の防御力を誇るほどになったのだ。

しかし大規模な城にありがちな薄暗い雰囲気は微塵も無く、大理石が敷き詰められた床やディテールまできらび煌びやかな彫刻が施されている柱は古典的で、明かり窓から差し込んだ光のラインがカーテンのように掛かっている。そのためか、この城は神々しささえ醸し出しているようにも思える。

現在、少年が走っているのは街のちょうど中心にある巨大図書館から放射線状に広がる街道の中でも、帝都の関所に通ずる道路である。いわば、この町の主要道である。

少年の背は少し高め、痩せてはいないが、活動的に引き締まった無駄のない姿からはいくら走ろうとも少しも暑苦しさを感じさせない。やや気性の荒そうな表情を象る顔の上の方、つまり額にバンダ

ナが巻かれ、それによつて立たされた激しい烈火のように赤い髪は自らの主の性格を顕著に示している。

また彼は学生なのだろう、城塞都市シグルズに一つしかない、世界有数の有名校で、学業の都市であるシグムンド帝国でも学力をはじめ、技術力、体力、その他如何なる面でも比肩する学校はどこにも無いとまで謳われた『シルフィエンド国立学園』の制服に身を包んでいる。この学校は珍しいしきたりや規則が多く、このような事は特に由緒正しい学校にその傾向が多い、また幸か不幸かシルフィエンド国立学園はその由緒正しい学校の代表格だった。従つて、シルフィエンド国立学園の規則は全世界でも極端に捻くれている。滅多にないが、先に事情を全く何も知らずに入学などした暁には、最初の一ヶ月は授業の内容よりも大量の規則を覚える事に辟易するのも無理はないとも言える程だ。

また、この学校は、巨大図書館と同じように学者たちの要望によつて設立されたので、設立と同時に巨大図書館を吸収して一体化してしまつたので、巨大図書館の閲覧はシルフィエンド国立学園の学生と講師の特権となっている。

巨大図書館に向かう少年の足にあわせて、汚れ一つ無い、潔癖ともいえる町の景観が左右に分かれて飛ぶ様に流れていく。かなりの速度で走っている証拠だ。

さつき太陽がのぼ昇ってきたから、赤い髪の少年はかなりの時間走っている事になる。

少年は十五、六歳に見えるが、その歳にしてはこの体力は尋常ではない。しかし彼のスピードは少しも鈍らず、むしろ加速しているようにもみえる。それどころか彼の顔には疲れなどは一切見えず、少しの息の乱れすらない。

今日は少年の学校は無い、理由は知らされていないが、昨日、休校の旨を伝えられた時の担任の表情から、何か大事が隠されている

のは、誰の目にも明らかだった。

だから昨日、大半の学生達はその《何か》に備えて図書館にいった。なぜなら学生達は兵士とは違い、一般的に腕っ節が立つ訳ではなく、もし戦争などが起きたら、即戦力になることはまず無い、逆にできることといったら、頭を使うぐらいしか無いからである。

しかし少年は昨日の報告を受けて図書館に急ぐ学生達の中に混じって、籠ってなにやら、といった事をした中にはいなかった。そもそも少年はそんな必要を感じなかった。だから、今日少年が図書館に行く理由は別の要件によるものである。それは、昨日、図書館に籠った学生の一人である、彼の友達に呼びだされたからだ。

ようやく図書館が見えてきた。シグルズの中心に位置するこの図書館はシグルズが都市として成り立ったところから存在するためか、古典的な街並みよりも一際古めかしく、壮大な歴史を思わせる。

その正門前に見知った顔を見つけた。整った顔立ちに落ち着いた容姿のこの美丈夫はどこか達観したような目つきをしていて、少年というよりも青年といった感じである。

正門にいる青年は少年を見つけると、手にしていた本を閉じて遠くから少年に向かって話しかけてきた。感情が欠けたようにも思える程の落ち着いた声だ。深く清んでいるので遠くからでも良く響く。

「遅いぞレイヴァン、もう時間が無い。三階に先行って準備をしている。要件はこれから言う。」

足早に去ろうとする青年をレイヴァンは引き留める。

「おいおいケント、少しぐらい待ってくれないじゃねえか」
「断る、早くしろ。」

ケントはそれだけ言う図書館内に足早に入ってしまった。続いてレイヴァンが今まさに閉じようとしていた図書館のドアに減速することなく突っ込む。受付の老婆に睨まれたが、華麗に無視し、ケントの後を追う。しかし、ケントはよほど足早なのか既に姿は見え無かった。

仕方なくレイヴァンは階段に急いだ。階段は一つしかない、続いて

いる方向は上ではなく下、つまり地下に繋がっている。階段を下りきり速度を緩めたレイヴアンは地下なのに

何故か少し眩しいぐらいの廊下を歩く分岐点が多い通路を迷いなく進む。壁は灰色一色で、ドアは黒檀で出来ている。町と違ってここは狭苦しかった。

ケントと部屋を示し合わせていないのに、レイヴアンの歩みは目的の部屋を知っているかのように淀みが無い。いや、事実知っているのだ。現在の世界を震撼させ、そして一般的に広まった《ブルーム》によって。

ブルームとは修行を積んだ人間が何らかのショックを受けるなどすると、その人の中に蓄えられた才能が何らかの形で現実に出てきてしまい、人間の領分を越えてしまう現象のことである。この現象の瞬間をある詩人がブルーム開花と例えたことより、そう呼ばれるようになった。

ブルームは生活用から戦闘用まで多彩な用途を持ち、特に戦場にも出せる程にまで戦闘に特化したブルームを会得している者をスキルホルダーという。

ただ、《修行》といっても大仰な事ではなく、きつかけさえあれば、今まで自分自身でも気付いていなかったぐらいの能力でさえ、ブルームとして会得してしまうこともある。つまりブルームを使う光景は今や珍しくない。特にこのシグルズでは、最低でも一人ひとつはブルームを獲得している。

現にレイヴアンが目的の部屋を知っているのも、ブルームを使ってケントと交信していたからである。因みに交信の為のブルームは基本的に誰もが持っている基礎的なもので、離れていても気軽に通話などができる。他にも多くのブルームにより人々の生活は成り立っている。

レイヴアンは目的の部屋に着いた。しかしドアが半開きだったので、結局ブルームを使う必要は無かったのだが。

レイヴァンが部屋に入ると、ケントが話しかけてきた。

「いましがた必要な文書を取ってきたところだ。レイヴァン、少し厄介なことが起きたのだ。」

「ちよつと待てよ。その前に今までどうしてオレが呼び出されたか聞いてねえ、話を始める前に教えてくれないんじゃないのか？」

抗議するレイヴァンに無視し、ケントは早く座れ、と、近くの椅子を親指で指差した。仕方なくレイヴァンがそれに座ると、ケントが口を開いた。

「昨日俺が図書館で調べ事をしていたのは知っているな。そこで俺は偶然なのだが、先生達が話込んでいるのを聞いてしまった、内容が内容なだけに、お前に伝えようと思ったのだ。」

レイヴァンの抗議を無視しながらも、重要そうな切り出し方であったし、結局ケントがレイヴァンを呼んだ理由を話し始めたので、レイヴァンは口をつぐまんだ。

「シグムンド帝国の歴史にも通じることなのだが……。」

「オレが解らねえとでもおもったんか？それだったら問題ねえぜ。」

「今までいくら戦争で戦況が悪化しても学生が戦線に立つことは無かったことなのだが、……知っているのだな」

「しつけれな、ケント。そんぐらいは解るぜ。シグムンドの歴史は知識人の歴史とも言えるぐらい、学者と学生に密接にから絡んでいるし、未来の知識人たるオレたちは将来シグルズを内面から支える役だから、傷つける訳にはいかない、とかの理由だったよな」

「解ってるなら話を始め易くて助かる。」

「それで？」と先を促すレイヴァン。そしてケントはやつと本題に至った。

「俺が昨日聞いた話に寄ると、俺達知識人が戦線に出されるらしい」「はあ？オレの言ったことの真逆じゃねえか。それにいまいち現実味がしねえな、学校の生徒で戦場に行った奴なんて聞いたこともねえし、第一、オレ達学生が戦線に行ったところで何ができるって言うんだ？」

「問題は最近の学園の教育方針にある。それはだな。」
しかし、ケントが説明しようとした矢先、部屋にフルフェイスマスクで顔を完全に隠した少女が勢いよく入ってきた。

盗み聞きされていたのか、と焦る二人だが、マスクの少女はそのマスクを外して二人に向き直った。少しウエーブがかかった群青色の肩に届かないぐらいの髪が下に舞い降りる。緑の瞳は若干の怒気が含まれていて、まっすぐレイヴァンに注がれている。息を切らしているのか、少し声大きい。

どうやらレイヴァンの知り合いらしく、ケントは警戒を解いた。

「レイヴァン！アンタなんで家にいないのよ！？」

レイヴァンが大きく溜息をついた。いきなり部屋に入ってきたレイヴァンの知り合いらしい開口一番やたら騒々しい少女に向けるレイヴァンは完全に呆れた表情を向ける。

レイヴァンの反応から、どうやら敵やスパイの類ではないようだ、と安心するケントと、会話を邪魔されたレイヴァンはそれぞれの反応を少女に返す。

「いや、どうして来たんだよ、セレナ。」

レイヴァンの声色には多少疲れているようだ。対照的に乱入者であったはずの少女は、さっきのレイヴァンの言葉に完全に逆上していた。緑色の目には少し涙目にもなっている。

「『どうして来たんだよ、』ってどういう事？ 私はアンタの家に رفتたのに、アンタがいなかったからここまで探してやったのに！」

怒る少女の言葉にレイヴァンはちよつと眉を持ち上げ、

「？ 心配してくれてたのか？」と、さっきの剣呑な雰囲気は単なる戯れだったのか、すまし顔で？ 気に聞いたりしている。

「なっ……！！？ そんなことないわよ！！ 私は大体アンタが休日の朝早くから家を空けているから探してあげただけよ！」

「益々妙だな、どうしてこんな時間から、オレの家に来てんだよ」

「忘れたの！？ わたしはただ……」

ここまで言っていきなり赤面した少女にさらに追撃を加えようと

するレイヴァン。そこでケントが割って入る。

「どうしたレイヴァン、さっきからこの人、セレナと言うのか。は誰なのだ。」

ケントの問いに気付いたレイヴァンが答える。

「ああ、こいつはセレストナっていうんだ。同じ学校に通ってるんだから見かけたことぐらいあるだろ」

「本名はセレストナというのか？」

「そう、でも皆からはセレナって呼んでもらってるわ。あんまり長いと変だし、あなたもそう呼んで」

「気持ちは解ったが、俺からは本名の方で呼ばせて貰う。しかし、どうしてここが解ったのだ。」

そう聞くケント。確かに彼にとってこれからレイヴァンと極秘の話をするのだから、容易に居場所が判られては困るからこの質問は当然といえるだろう。

「ふえ？ ああ、私はレイヴァンと常に交信出来るからよ」

そんな事ができるブルームをケントは聞いたことが無いが、交信のブルームは人間の精神的な部分に大きな干渉を受ける代物だ。ある程度近くに通信対象がいなければ通信が成立しない。もし仮に交信できるとしたら、この二人は無意識下でかなりシンクロしていることになる。平たく言えばかなり親しい、もしくは惹かれ合ってる関係であれば説明がつく。しかしセレナはケントにとって初対面の人だ。ケントは無遠慮に身の上を聞く事は自分の条理に反するので深い詮索は止めておく事にした。だがもしこの少女が問者に通じる可能性があるなら、それは阻止しなければならない。結局二つの思量のうち、後者が勝った。

「セレストナ。済まないが自己紹介をして欲しい。なぜなら……」

「ああ、それなら問題ねえな、セレナ？」

「構わないわよ。 えっと、私はセレナ。一応シルフィエンドではレイヴァンと同じクラスで、レイヴァンとは同じ施設出身ね。それと寮ではレイヴァンのとなりの部屋よ」

セレナは最後の部分を特に強調したが、それ以外は特に問題は無さそうだ。

「よくベランダから勝手に入って来るから困ってるぜ」

その言葉にセレナが急に食ってかかる。

「なにそれ！？ 変なこと言わないでよ、誤解されちゃうじゃない！」

「間違った事は言っていないぜ？」

「アンタにご飯作ってるだけじゃない！ 今日なんて特にがんばったのに……」

会って早々に二回目の言い争いを始めてしまった。どうやらこの二人は仲が悪いのかすぐ口論になるようだ。ケントは一刻も早くレイヴアンに用件を伝えたいのだが、セレナがいてはどうにもやりにくい。しかし五月蠅い相手だとしても、レイヴアンを追ってきた少女を追い出すのはケントの紳士心が咎めた。

「だいたい、何があってお前はマスクなんて付けてきたんだ？」

ケントの苦悩にお構いなしにレイヴアンはセレナにまた口論の火種になり内容を聞いている。ケントは危機感を感じたが案の定、また始まってしまったようだ。

「すぐそこで拾ったのよ。おもしろい形だしアンタを驚かそうと思っただけだ。朝からスカされて頭きてるんだから！」

「そんなことは無えだろ、こちら辺に常にフルフェイスのマスクを設置している訳無えじゃねえか。普通テロリストかなんかが使う物だぜ？」

「ふえ？ だって本当に落ちてたんだもん」

ケントはというとまた言い争いを始めた二人に完全に主導権を二人に奪われたらしく、思い切り劣勢だ。

ギアアギアと言い合いを続ける二人をケントはいよいよ本格的に頭を抱えそうになったが、元々レイヴアンを呼んだ内容さえまともに話し切れていない事もあってかなり切羽詰まっている。何とか話の流れを自分の方向に持って行きたいのだが、事態は一向に改善

しそうにない。

その硬直状態を解いたのは凜と清んだ声だった。

ケントが声のする方を見ると、部屋に入り口に流れるような長い濡羽色の黒髪をカチューシャで背中に垂らした女性が立っていた。レイヴアン達と同じ制服を着ていたが、歳はレイヴアンと同じくらいか少し上、といったところだ。

「貴方達。少々おふざけが過ぎませんこと？ 貴方達の声は他の部屋にまで届いていますわよ。ご存じかしら？」

いきなりの棘のある言葉使いだったが、唯一部屋の中で女性に気付いたケントが対応する。

「それはすまないことをした。今すぐ止めさせるから安心してくれ。」

「当然よ。……あら？ そのあなた、その手に持っている物は何？」

女性の目はセーラが被って来たマスクに注がれている。

「それをどこで拾ったの？」

いきなり聞かれたセーラは一瞬「ふえ？」と変な声を出したが、

「ああ、これ？ これならさっき廊下で拾ったの」

と、無邪気に答えた

「いいえ、これは私たちの物です。無くして困っていたの。勝手に持って行かないでくださいねこと？」

「そうだったの？ 帰りがけに受け付けのおばちゃんにでも渡そうかと思っただけ……」

「とにかく返してください。私たちには大切な物なの」

そう言うが速いか女性はセーラの手からマスクをひったくると、素早く、しかし優雅に身を翻した。そのまま部屋を出ようとする彼女に。「おい、待てよ」と言っただけレイヴアンの声に全く耳を貸さず、無言で去っていった。

「何だったんだ……？ あいつぁ？」

レイヴアンが一人つぶやいた。あまりの突然のことで、思い切り振

り回されたのは、レイヴアンの生来の性格には珍しい事だったのだろう。他の二人もまだ整理がつかないようで、呆然としている。

少したった後、思い出したようにレイヴアンが「しかし、」口を開いた。

「どうしてあいつはマスクなんて物を持ってたんだ？」

「どうして……って、もともとはあの人の物だったからとか言ってたじゃない？」

「そういう意味じゃねえよ、あのマスクはどう見ても普通は手に入らないはずだからな。なんであいつは自分の物だ、と言い張ったんだ？」

「確かに、レイヴアンの言うことは一理あるな。あのような物は普通に生活していたら関わることはまずないからな。」

ケントが「だが。」と一瞬間を置く。

「俺の話が脱線しすぎている。お前らには生憎だがその話題に終始するよりも、俺の話題にそろそろ話を戻してもらおう。」

ここでケントは一度言葉を切り、セレナを申し訳無さそうに見た。

「そこでだが、少し悪いがセレストナさんには席を外してもらいたい。」

そう言われたセレナだが、なにせ今までのレイヴアン達の話の流れを全く知らずに部屋に入ってきたセレナはついさっきと同じように

「ふえ？」と聞き返した

「申し訳ないが、なるべく今俺たちが話している話の内容を他の人間に漏洩することは少し気が引けてな。せつかく身内を追って来てくれた人を追い返す事はしたくないのだが……」

「話？……」というここはあなた達二人は真面目な話でもしていたの？いつものようにレイヴアンが勝手に家を出てただけじゃなく？」

「『いつものように』って、いつもはそんなことしねえぜ。オレはここでレイヴアンはガリガリと頭を掻きながら一応ケントを肯定しておく。」

「ああ、そうだ。オレはケントに呼ばれてここに来ただけなんだ」
「そうだったの？」

「まだその話の本题まで聞かされてないんだが……」

「誰のせいでだと思ってる、レイヴアン。不意で脱線気味だった
が、早く話してしまいたい。」

「セレナ、そういう訳だぜ。すまねえな」

「解ったわ。じゃあ一階のロビーで待つてるから」

セレナが部屋を出て行き、それにレイヴアンがついて行った。見送
っただけらしく、すぐ戻ってきたのだが。

「さて、間が開くことになったが説明を再開しよう。俺達が戦場に
送られる理由からだ。」

「ああ、それに、どうしてオレが呼ばれたかも教えて欲しいんだが
な もう無視はさせねえぞ」

「解ったから黙っている。」

「じゃあ頼む。これからオレはしゃべんねえから」

ケントは一度頷いてから話し始めた。

「実は俺達がシルフィエンド国立学園に入った時に学園の方針が
変わったらしい。今までは生活に使うブルームだけを生徒に教えて来
たのだが、俺達は護身術の名目上、戦闘用のブルームを仕込まれた。」

「そうか？オレはあんまりそんな感じはしなかったが？」

「当たり前だ。俺達の第から始まった事だから、俺達はそれしか知
らないからに決まっているだろう。まだ戦況は悪化していないが、
だがもうすぐ方針が変わってから半年になる。試作品の兵器として
生徒を試すには丁度良い頃合いだろう。あくまで試作品だから大量
に出す訳にはいかないが、五、六人は駆り出されるのは確実だ。恐
らく小隊として普通に任務を遂行することになるだろう。」

「加えて、シルフィエンド国立学園は教育機関だ。在籍中の生徒を
死なすような真似はしたくないだろうが、この件は秘密裏だが帝国
が絡んでくる。すると国策となつては話は別になってくる。死人が

出ても揉み消し工作で何とかしてしまうだろう。そこでだ。レイヴァン、お前に俺の作る軍隊に入隊してもらいたい。」

「つまり、お前はオレに死地に出向いて、死ぬときは死んでくれと？」

「端的に言つとそうだ。お前にはそれなりの理由があるだろう？ それにお前の戦闘用ブルームには欠陥があるとはいえ、十分な戦力になる。」

「ああ、解った。オレたちはお前の軍隊に入る。それで良いな？」

「そうしてくれ。……………ん？ 俺たち、だと？」

「そうだ。お前もそれで良いよな、・・・セレナ？」

呼ばれたセレナが自然な感じでドアから普通に入って来た。ドアの前で陣取っていた用である。

「別にいいわよ、レイヴァン。ケントさん、よろしくお願いします」お辞儀したセレナの髪がきれいに宙に舞った。ケントが驚きで目を見開く。

「……………見送りに行った時に立ち聞きするように言ったのか。二人共入ってくれて有り難いが、どうしてこんなまねを？」

「そりやそうだぜ。戦線だとか聞かされたしな、オレのブルームの『欠陥』してる場所はセレナの中に入ってるんだ」

「すると……………セレストナさんがお前の片割れなのだな。お前のブルームの一部が入ってしまったのは。」

「そうだ。オレのブルームは全部オレの物じゃ無えんだ。半分はセレナの中にあつてな、セレナがいなきゃオレは全力を出せ無えからな」

「そうそう。私がいないとレイヴァンは半人前だからね」

「おい待てセレナ。お前の場合はおレがいなきゃあ半人前どころか半人前以下だぞ」

「止める二人とも。そうか、しかしまだこの人数では軍としては成り立たないな……………少なくとも四人以上いなくては申請が出来ない。」
「ならばお前の妹がいるだろ。そいつを呼べば良いじゃねえか」

「冗談では無い。妹を危険な所につれていけるか。ミイナはここに置いていく。帝都なら少なくとも一年は安全だ。」

「一年も待っていてくれるかねえ……オレには駄々をこねてでもついてくるとしか考えられねえが」

「それは否定できないが、説得するしかないだろう。」

「よし、そうと決まればとりあえず今日はお開きだな？ ケント。長い時間どつかで話合つてると怪しまれるぜ？」

その言葉で一同は解散した。的を射た事を言った本人であるレイヴァンはセレナと一緒に出て行ったが、ケントは一人残って少し先の事を考えていた。

最初の問題。人数確保が何よりも先決だ。そしてその次は……

ケントは思考の渦に一段落をつけると部屋を後にした。早く明日に備えてすぐに行動を起こさなければならぬ。ケントの目には強い使命感が宿っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1615z/>

双炎の廻る回旋曲

2011年12月5日21時56分発行